

『新潟日報』「生活記録」欄の展開

猿 山 隆 子

Development of Niigata-Nippo " seikatsu-kiroku " Column

Takako SARUYAMA

はじめに

本稿は、1955（昭和30）年12月9日から1962年4月まで、新潟県の地方紙である新潟日報に連載された「生活記録」欄の展開および内容を把握するものである。

「生活記録」欄は、1950年代に展開した生活記録運動が高潮期を迎えた時期に始まり、生活記録運動が批判にさらされ、新しい生活記録のあり方を模索し始めた時期と同じくして廃止された。マスメディアを通じた、投稿と選者による評の形式である「生活記録」欄は、直接的な対面による集団での書き合い、話し合いを重視した生活記録運動とはその形式のみならずその活動内容も異なる。この当時、新聞や雑誌などへの投稿が増えていたが、このようなマスメディアを通じた書く活動は、生活記録運動とは区別されていた。そのため、このようなマスメディアを通じた生活記録の活動はこれまで生活記録運動のなかで注目されることはなかった。しかし、青年の文化活動や生活記録運動に積極的に取り組んでいた選者が選評を担当し、6年間もの長い期間連載された「生活記録」欄の活動を整理することは、生活記録運動とは異なる、もうひとつの生活記録を明らかにすることにもつながるであろう。

1.新潟日報の概要 ―読者とともに作る紙面―

1942（昭和17）年に「一県一紙」の国策に順応し誕生した新潟日報は、戦後、占領下という取材上の制約から解除されてから、「あらゆる読者にわかりやすい新聞を提供し、読者に紙面を開放するという方針」がとられた¹⁾。「戦前の新聞に掲載された寄稿原稿といえば、ほとんどが大学教授や有職者に限られていて、それはそれなりに意味もあったが、これにはとかく上から下への天下りのうらみがあった。そこで読者の声を直接聞き、逆に下から上に伝え、みんなで考え、みんなで話し合う場を提供したのである」²⁾。そうした方針から、紙面には、毎日の新聞にそれぞれの紙面に応じた投稿欄や相談室を設けられたり、読者アンケートを行い、「紙上討論」が行われるなど、川柳、俳句、コント、短編小説、読者懸賞論文など読者文芸欄も多数にのぼっている。また、日本一の穀倉地帯ということから、「宮農の指針」として「農業欄」³⁾が設けられている。このように、新潟日報は、紙面を読者に開放し、地域色を大きく打ち出していたといえる。

新潟日報はどのような人々に読まれていたのだろうか。「生活記録」欄が連載されていた当時の新潟日報の購読状況をみてみる。1960（昭和35）年の新潟日報の購読世帯調査の結果によ

ると、職業構成では、農林業世帯が35.5%を占めており、次いで給料生活世帯の22.2%、商工業サービス業の21.5%が続き、労務者世帯の12.6%、自由業3%、その他5.1%であり、農林業を営む世帯に多く購読されている。新潟日報を一年以上購読している固定読者世帯は、77.8%、併読世帯は22.1%であり、新潟日報が主読紙として県内に普及していた⁴⁾ことが分かる。

2. 「生活記録」欄の系譜

新潟日報が生活記録を連載し始めたのは、1955（昭和30）年12月9日のことである。「文化」のページでは、青年団、職場サークルなど青年の動向を取材し、青年を取り巻く問題を取り上げており、読者の好評を得ていた。その中で、「青年団の羅針盤である」機関紙を分析し、「自分たちの土の中から生まれた体験が生々しく息吹いている」生活記録が青年団を動かす力になっていると指摘し、「働く青年男女」を対象に原稿を募集し始めたのである。「生活記録＝青年団、村づくりその他日常の悩みや行動を具体的に。（四百字詰め原稿用紙二枚）」（1955.12.9）。

1956（昭和31）年3月までは、新聞社によって選ばれた生活記録だけが掲載されていたが、投稿が増えたことにより、選者による選と評が行われることになった。選者は、浪江虔、安部知二、和田傳、鶴見和子、福島要一、大田堯、野間宏の7人である。注目されるのは、生活記録で取り上げられた問題は「生活記録」欄だけにとどまらず、たびたび読者に意見を求め、「紙上討論」として大きく取り上げていることである。たとえば、1956（昭和31）年12月12日の生活記録「20ワットの電球から逃れたい」⁵⁾に対して、学芸部では「みんなの問題」として考えようと投稿を呼びかけた。1月23日に特集として50数編の読者の意見を掲載し、選者である福島がそれらに対して感想を寄せている。また、選者による感想や読者への要求などが掲載されたり、読者と選者の座談会が設けられたり、生活記録の書き方や「生活記録」欄について読者からの質問や意見などを募集し、選者が答えるというように、生活記録に関する理解をうながすためにさまざまな工夫が行われた。

1956（昭和31）年2月3日から、「文化」のページから、青年のためのページである「青年」のページに移り、さらに1957（昭和32）年10月24日から、「青年」のページに掲載されていた「生活記録」欄は「家庭」のページに移った。「家庭」のページに移行したことに伴い、「青年以外の方々から」広く募集するようになった。「父、母、娘、息子、そしてまた夫、妻、それぞれの暮らしの中から生まれた喜び、悩み、疑問などあなた自身の問題をお寄せ下さい」（1957.10.24）。

この当時、朝日新聞の「ひととき」欄から生まれた草の実会など、新聞、雑誌の投稿欄からサークルが生まれることが一つの潮流であった。新潟日報でも、「生活記録」欄を契機に、読者同士の結びつきが生まれている。1957（昭和32）年1月、読者の呼びかけにより、「生活記録」欄を含んだ投書欄の投稿者が集まり、「新潟日報青年読者サークル」が誕生した。各支部で、話し合い、レクリエーション、機関紙の発行などが行われた。さらに1961年11月には、読者の呼びかけによって、サークル同士の交流を目的にした「県サークル協議会」が結成され、多くのサークルが参加している⁶⁾。この協議会は、この時期に誕生した多くのサークルが活動の停

猿山：『新潟日報』「生活記録」欄の展開

滞やマンネリ化によりいきづまりが言われ始めことに危機感を持った読者がいきづまりの打破しようと紙上で呼びかけたことにより結成されたものである。

1962（昭和32）年3月19日、学芸部からの「おことわり」が掲載され、読者に廃止が伝えられた。「全国的にも「生活記録」の各種活動や思潮もようやく定着しつつあるといわれる現在、本欄の役割もほぼはたしたと思われます」（1962.3.19）。そして、4月2日、選者である野間宏の2年にわたる選評の決算を最後に「生活記録」欄は廃止された。

表1 新潟日報「生活記録」欄の歩み

年	月日	「生活記録」欄
1955	12月9日	・青年団で取り組まれていた生活記録に着目し、新潟日報の誌上で青年の特集を組むために、「働く青年男女」を対象に、生活記録の原稿が募集された。その後、ほぼ週1回のペースで「文化」のページに掲載。
1956	2月3日	・「生活記録」欄が「文化」のページから、都市農漁村を問わず青年のための「青年」のページに移行。
	3月23日	・生活記録の投稿が増えたという理由から、「読者の要望に応えるため」、選者による選と評が行われることになる。 選者：浪江虔（～1956年8月8日）
	8月8日	選者：阿部知二（～1956年11月7日）
	11月7日	選者：和田傳（～1957年2月13日）
	12月12日	・生活記録「20ワットの電球あら逃れたい」に対し、学芸部が「みんなの問題として“広場”で考えてみましょう」と呼びかけ、原稿を募集。
	12月19日	・第1回の選者である浪江虔と第3回の選者である和田傳との生活記録に関する対談。「投書を通じて見た農村問題と青年たちの生活態度」
1957	1月9日	・12月5日に掲載された生活記録「農家の勤人 秋ー私には一番イヤな時」に対する選者である和田の評「生活技術について 諸君自らの解決の探究」に対して、読者から反論の作品が寄せられる。
	1月16日	投稿者自らの呼びかけにより、「新潟日報青年読者サークル」が発足。発足当初、7名であった会員は県下一円に広がる。話し合いを中心にした例会、回覧ノート、機関紙の発行などの活動が行われた。
	1月23日	・12月12日の生活記録「20ワットの電球から逃れたい」に対して、50数編の原稿が寄せられ、「広場」で特集が組まれた。
	2月13日	選者：鶴見和子（～1957年8月28日）
	8月28日	選者：福島要一（～1959年3月27日）
	10月17日	・「生活記録」欄が「青年」のページから「家庭」のページに移行。それに伴い、投稿者の対象を「青年以外の一般の方々」に広げ、原稿を募集した。→その後、投稿者の年齢層が広がった。
1959	3月27日	選者：大田堯（～1960年3月26日）
1960	3月26日	選者：野間宏（～1962年4月2日）
	8月7日	・選者の野間宏を囲んで「生活記録を中心とした懇談会」が開かれる。9名の読者が出席。その内容は、8月11日に掲載。
1961	4月3日	・「生活記録」欄が「家庭」のページから「青年」のページに移行。
	4月10日	・「選者への手紙」として、「野間宏選者に、こんなことを話したい、聞いてみたい、また選についても、こうしてほしい、と思っていることを」募集。野間宏の回答は、5月8日、5月15日に掲載。
	11月13日	・サークルのいきづまりを打破しようと、県下のサークルの交流を目的にした「県サークル協議会」が発足。
1962	3月19日	・「生活記録」欄の廃止の「おことわり」が掲載。
	4月2日	・選者である野間宏の「選者のことば」を最後に「生活記録」欄が廃止。

3. 投稿者の状況

「生活記録」欄の投稿者はどのような人々だったのだろうか。

約6年間の連載は285回であり、掲載された生活記録の数は272編であった。それ以外は、選者と投稿者との対談や選者が読者に向けて書いた文章などである。投稿者数は、何度か掲載されている投稿者もいることが推測されるが匿名が多いため、定かではない。性別、年齢、職業についても未記入が多く、作品内容からの推定も含むが、その概況は示している。

投稿者の男女の比率は、男性48%、女性44%とほぼ同数である。

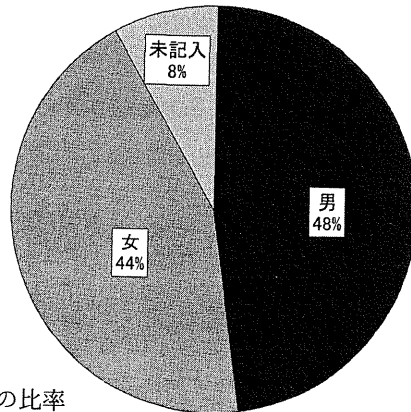


図1 投稿者の男女の比率

明記されている職業をみると、農業に従事している者が50.1%と最も多い。投稿は都市農漁村を問わず募集されていたが、農業を営む世帯に多く購読されていたことも関係しているだろう。しかし、生活記録の内容から見ると、農業に従事しながら、工場で働くという「半農半工」という状況であったり、農閑期に出稼ぎに出る投稿者が多く、農業だけでは経営が成り立たない状況を示している。

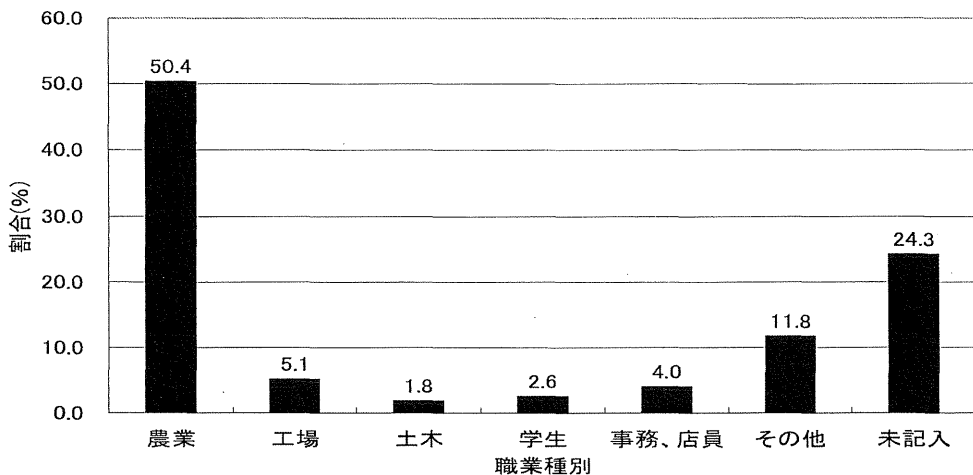


図2 投稿者の職業種別の割合

投稿者の年齢については、「生活記録」欄が始まった当初は「働く青年男女」が投稿者の対象であり、10代後半から二十代前半が投稿者の過半数を占めている。1957年10月からは、「青年以外の一般の方々」にまで広げたことにより、その後は13歳から62歳までの幅広い年齢の投稿者をみることができるが、その数は少ない。

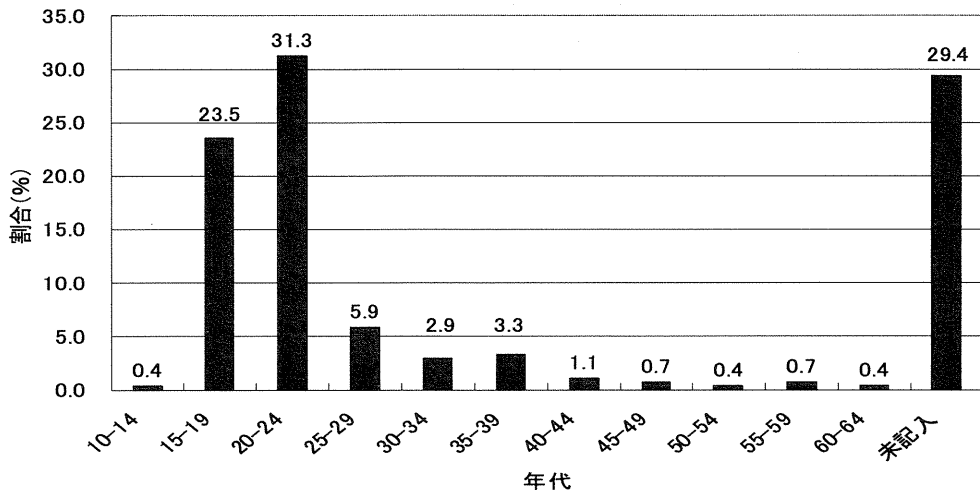


図3 投稿者の年齢の割合

4. 生活記録の内容

(1) 生活記録に浮かび上がる問題

投稿された生活記録はどのようなものだったのか。掲載された生活記録の内容は次の7項目に分類することができる。

- (1) 農業経営に関する問題
- (2) 労働（女性の労働時間、農業以外の仕事など）に関する問題
- (3) 人間関係に関する問題（家族間、地域の人間関係）
- (4) 慣習の問題
- (5) 結婚・恋愛の問題
- (6) 学習・サークルの問題
- (7) その他

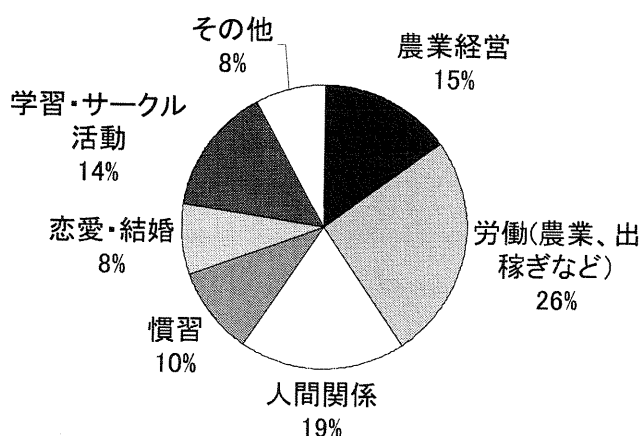


図4 生活記録のテーマ

農業を営む投稿者が多いため、農業経営の多角化、機械化による経営近代化、農業の進路、出稼ぎ問題など、農業の生産活動に結びついたものが多い。次いで、長男と二男三男の職業、農家の嫁の立場など、農業経営に関わって、家族間、地域の人間関係の問題が多く、慣習の問題とも深く結びついている。また、十代、二十代の若者が投稿者に多いため、学業の問題、サークル活動に関するテーマが多いこと、さらに、恋愛・結婚に関わる慣習の問題が挙げられていることも注目できる。1957(昭和32)年10月から投稿者の幅を広げたことにより、数は少ないがそれまでとは異なるテーマとして、子ども、孫の様子、配偶者の様子などを描いた生活記録が見られる。

これらのテーマは、厳密に切り離すことのできないものであり、複数のテーマが交じり合っているものが多い。そのため、生活記録の作品がひとつのテーマで成り立っていることを意味するものではない。

(2) 他者との結びつき

生活記録の内容全体を通して、投稿者の孤立感が浮かび上がっている。「自分はこれだけやっているのに」というように、一人で悩み、苦しんでいる様子が表れている。家庭や友人関係のなかななどで、話し合いができる状況が整っていなかったといえる。

そうした中で、紙面で不特定多数の人々に生活記録を公表することは、「新潟日報青年欄サークル」が結成されたように、孤立した個人が地域を越えて結びつく契機になっていた。サークル結成について、紙面上で不満な悩みの出しばなしではなく、直接話し合えること、地域を越えた集いであるために、それらが地域の人々に筒抜けになる心配がないことに対する喜びが語られている。「友だちがほしかったからです。オラたちいまの農村にはいっぺえこと不満があるども、村の若いもんは無気力で相談してものってこねんです」、「ここで俺とおんなじ悩みにぶつかっている人がいる。こういう仲間と一緒に話したら・・・と前から思ってた」。サークルでの話し合いのテーマは、「村の封建制について」「家や部落の因習を破るには」「明るい人間

関係を築くために」といった「"反封建"の一本ヤリ」であった。サークルの結成は地域や家庭で孤立した個人が、気兼ねなく話し合う喜びであるとともに、個々の問題を結びあわせ、共通した問題として捉えていたことがうかがえる。

5. 選者と選評の方法

生活記録の選と評を担当した選者は以下のとおりである。

表2 選者一覧

選評者	略歴	選評期間
浪江虔	農山漁村文化協会常任理事	1956年5月9日～1956年8月8日
阿部知二	作家	1956年8月18日～1956年11月7日
和田傳	農民小説作家(『沃土』『大日向村』など)、日本農民文学会常任理事	1956年11月7日～1957年2月13日
鶴見和子	評論家(『エンピツをにぎる主婦』など)	1957年2月13日～8月28日
福田要一	日本学術会議員、農業技術協会評議員、日青協などの講師兼任	1957年8月28日～1959年3月27日
大田堯	東京大学教育学部助教授	1957年3月27日～1960年3月26日
野間宏	作家(『真空地帯』、生活記録の評論『若い日の文学探究』)	1957年3月26日～1962年4月2日

※選評期間は選者交代の際の「選者の言葉」を含む。

※略歴は「生活記録」欄で紹介されている当時の略歴をまとめた。

「生活記録」欄に投稿された生活記録は、新聞社の予選を通過して選者の手に渡る。選者は何編かの生活記録のなかから、掲載する1編の生活記録を選び、評をするという形式である。

「生活記録」欄において選者が求められたのは、「明日をよりよく生きる為の一つの足がかり」とするための助言者としての役割であった。「…心やすく話せるおじいさんがいて、長い経験と豊かな学識から私たちの考え方が正しいかどうかとか、こんな本を読んだらどうかとか、批判や助言をしてもらえたら…そしてさらにすすんでは、思うことを文字で表すことのむずかしさに対してまでいろいろと注意してもらえたらそれはさらに充実したものになると思います。」(1956.9.5)。

その選評は、新聞の記事であるため、多くの読者の存在を想定しなければならない。また、一人一人の生活の問題を深く掘り下げていくには紙面上では限界があるだろう。生活記録運動とは異なる形式のなかで、選者はどのような選評を行っていたのか。

(1) 浪江虔

当時、農山漁村文化協会常任理事であった浪江虔は、選評の方法について明確にしている。「コンクールばやりの時代ですが、生活記録コンクールの審査員をおひきうけたつもりは少しありません。生きていくことそれ事態にまつわる悩み、何か一つでの新しいことをすると、

それが必ずまきおこす波紋、これらと体当たりし、もまれもまれて、しかもなおやけくそにならない、若々しい人たちの、飾り気のない記録がほしいのです。」(1956.3.23)「はじめにことわっておくが、十数編の記録の中から選び出す一編は「生活記録コンクール入賞作品」ではない。何らかの問題点が、くっきりと浮き出ているものをとりあげて、読者のみなさんといっしょに考えてみようと思って選び出すわけである」(1956.5.9)。評では、どこが問題なのかを解説し、浪江が考える起こすべき行動を具体的に助言している。

(2) 阿部知二

小説家、評論家である阿部知二は、「私はこの人をえらいと思います。」や「りっぱなことだと思いました。」という評の言葉に表されるように、浪江とは反対に、生活の問題に対して好ましいと思える行動をしたことがわかる生活記録を選んでいいる。読者に対し、厳しい現実にとどのように立ち向かっていくか、という好例として示しているといえる。そのうえで、さらに投稿者がどのような方向にむかっていくべきかを助言している。

阿部は、「深刻な人生の問題」だけでなく、「人生を味わい深いものにする」と、「とりとめもない」「ほんのささやかなこと」が書かれたものを取りあげている点が他の選者とは異っている。

(3) 和田傳

和田の選評で特徴的なのは、読者との論争が掲載されていることである。例えば、農業の過酷な労働について訴える生活記録に対し、「農民作家」「農村の文化・生活の研究家」⁷⁾であった和田は、これまでの経験から農民は「実質稼働」を伴わない日が多いと評する⁸⁾。それに対し、読者から「真の農家を知らぬ」と多くの批判が寄せられた。和田はその批判を掲載し、さらに答えている⁹⁾。浪江が選を引き受けていた時にも読者からの反論があったが、掲載されなかった¹⁰⁾。和田がこのやりとりを掲載したことは、読者はただ選者の言葉を受け取るだけの受け身の姿勢ではなく、読者が恐れずに直言し、ともに話し合い、互いの理解を深める場としての「生活記録」欄のあり方を示唆している。

(4) 鶴見和子

生活記録運動に積極的に関わっていた鶴見和子は、「お互いにちがった立場からの生き方やものの考え方を、ぶっつけあっていくこと」の必要性を主張し、「お互いにてっていの的に話し合う場所」として「生活記録」欄を育てていこうと呼びかけた¹¹⁾。鶴見自身の意見や考え方を示すとともに、投稿された生活記録をつき合わせて、生活の違いや意見の違いを比較しあうところに鶴見の選評の特徴がある。それは、取り上げられた問題が投稿者個人の特殊な問題ではなく、他者の問題に結びついていることを示すものであり、より深く問題を理解するためのきっかけにもなるものであったといえる。しかし、紙面上での生活記録の方法として、コミュニケーションに限界があることを理解しており、投稿者がサークルなどの集団での話し合いの場を作ることを求めている。

（５）福島要一

朝日新聞「ひととき」欄から生まれた「女中さん」の生活記録サークル「希交会」に関わっていた福島を選評は具体的な助言がほとんど出されていない。読者からも「講評助言をもっと手きびしく」という意見が出ていたが、福島は「二十五歳僕が教えたなら、あとの七十五歳は自分のもので応じてもらいたんだ」（1958.6.27）というように、選者である自分の役割を回答者ではなく、考えを深めるためのきっかけであることを語っている。

評の方法では、福島は匿名性について疑問視している。「大切なことは、ほんとのことをいうことで、匿名でなければほんとのことがいいにくい時には、匿名を使ってよろしい。」としながらも、「ただ選者の感想としては、せっかくお返事を書こう、呼びかけたいという気持ちが、匿名のため、ちょっと傷つけられることは事実です。」（1957.12.29）と語りかけている。そして、選評の中で「紙上匿名でM子となりましたが、これは名前をかくす必要がないと私が考えましたので、本名にしました。お許してください。」（1958.11.18）など、「不用意な匿名」を否定しているため、匿名のものが少ない。

また、福島は、多くの読者を想定しなければならないマスメディアにおける生活記録のあり方として同じ投稿者の原稿は採用しないという方針をとっている。「原則の立て方からいえば、内容さえよければ、何べん同じ人のものを採ってもよいわけですが、何分多くの人が、真剣に書いたものばかりですから、多少よいからといって、あまり同じ人のものが出れば、やっぱり不公平になると思って、これも涙をのんでこらえました」（1959.3.27）。

（６）大田堯

青年団活動で生活記録運動に取り組んでいた大田堯は、紙面上での生活記録の表現について疑問を投げかけている。「いきなり活字になって広く読まれることを始めから予定して書かれるばあい、どれほどその本領が発揮されるか、頭をかしげぬわけにはいきません。まして筆者の方々のくらしの現実から遠く離れたところで、手さぐりの選評をするなどということになると、いっそうためらわずにおれないのです」（1959.3.27）。そして、大田は「生活記録」欄の意味を問いながら、それを克服するために「一つのサークルのようにできるだけ自由な話し合い、考え合いの場にしたいものです。」と、鶴見同様に、意見を交わし合う場にすることを目標に掲げている。そのため、「すでにのせた記録の反応を大切にしたい」と読者からの意見を載せたり、「ほかの記録とも、根っ子のところで、どこかつなげて考えてけるようなものをつとめて選んでいる」。評では、採り上げた生活記録だけでなく、その週に投稿された生活記録にも簡単に触れ、全体的な傾向や問題点を指摘している。

しかし、大田は選者交代の際に、「どんなに思いわずらってみても、評者としては、悲しいことに眼前の文章表現の形式をとおして以外には、記録の筆者の生活を理解することができないのである。」と紙上の生活記録の困難さを指摘し、「生活記録」欄を「四百字二枚の生活記録による表現と、その背後の筆者の現実の生活との統一的理解という、はなはだしんどい仕事」と苦心したことを述べている。また、「話し合いの場」にしたいという考えが「こちらが考えてみただけのことで、けっきょくうまくいかなかった。」と、他者と理解しあい、問題の理解

を深める上で、紙面上で生活記録を選評する「生活記録」欄の難しさを語っている。

(7) 野間宏

野間の選評の特徴は、どの部分をより注目して詳細に書くべきか、表現方法を中心に評をしていることが挙げられる。生活を認識し、生活の矛盾をしっかりと捉えていくためには、焦点をすえて見たものを言葉を使って表現することにより深まるものだという考えが強調されている。

それは単にひとりの書き手として「生活記録」欄だけで完結するものとしてではない。「生活記録」欄の水準を上げ、書き手、読み手を前進させ、生活の問題に積極的に働きかける力を育てていくものとして、「生活記録」欄を仲立ちにしてグループやサークルをつくること、あるいはグループやサークルで「生活記録」欄を生かすなど他者とともに書き、その記録を「生活記録」欄に寄せることを求めた。

また、選評だけではなく、野間自らが要望し、読者との座談会を開いたり、「選者への手紙」と題した読者からの質問や意見を募集し、生活記録の書き方、その意味を説明するなど、読者との積極的な交流を行っている点が注目できる。さらに書き手を激励するために多くの投稿作品に触れるやり方から、評の内容を深めるために1編にしぼるというやり方に変えるなど、投稿者の意見や状況、「生活記録」欄の発展を考え、選評の方法を模索していた。投稿者/読者の声に耳を傾け、「生活記録」欄を充実させようとしていたことが分かる。

—小括—

以上、概観してきたように、新潟日報の「生活記録」欄の選評は、生活記録運動とは異なる、紙面上でのコミュニケーションという形式のなかで選者たちが模索した方法である。対面で、空間・時間を共有する生活記録運動とは異なり、空間・時間を切り離し、多くの読者を想定しなければならないマス・メディアを通じた生活記録の活動のなかで、作品としての善し悪しよりも内容に重点を置き、生活の問題が浮かび上がっている生活記録を取り上げて、投稿者/読者自身が問題を深めるためのきっかけとして選評しており、さらに、サークル・地域などの他者との関係性について言及していることが注目される。紙面上での選者と投稿者/読者との関係性、問題に取り組むための連続性などの限界とその影響、マス・メディアを媒介にした生活記録の可能性について、コミュニケーションという視点から今後より詳細な検討をしたい。そして、生活記録運動の展開のなかでどのような位置づけができるのかについて考察していきたい。

注

¹⁾ 「五 相次ぐ紙面刷新」『新潟日報二十五周年史』新潟日報社史編集委員会、新潟日報社、1967年、119頁。

²⁾ 同前書、123頁。

³⁾ 同前書、122頁。

猿山：『新潟日報』「生活記録」欄の展開

⁴⁾ 同前書、217頁。

⁵⁾ うす暗い電灯の下での夕食の支度を嘆いた生活記録。「おじいさん」と父の酒とタバコを1日半本ずつ
儉約すれば、1ヵ月の台所の電灯料が60円出せて、女性の仕事の能率も上がると訴えている。それに対
し、読者からは、同じ経験、解決方法、農村の「ツマシさ」についての意見が寄せられた。

⁶⁾ 1961（昭和36）年11月13日付 新潟日報「サークル活動のカベを破ろう 県協議会が発足」

⁷⁾ 1956（昭和31）年11月7日付 新潟日報「筆は生活への愛情 選者に和田傳氏」

⁸⁾ 1956（昭和31）年12月5日付 生活記録「農家の勤人 秋ー私には一番イヤな時」評「生活技術につい
て 諸君自ら解決の探究を」

⁹⁾ 1957（昭和32）年1月9日付 生活記録「真の百姓を知らぬ 再び“農家の勤人”に」評「勤勉ながら働
けぬ 条件ができていない」

¹⁰⁾ 1951（昭和26）年6月8日付 新潟日報 浪江虔「数人の方から反論をいただきましたが、もう少しよ
く読んでいただければ、こういう誤解は生じなかったはずなのだが、と感ずることが多かったようんじ
思います」。和田はこうした読者の「誤解」も含め、紙面上で読者の反論に答えている。

¹¹⁾ 1957（昭和32）年2月13日付 新潟日報 鶴見和子「生活記録 選者に鶴見和子氏 考え方をぶっつ
け合って」